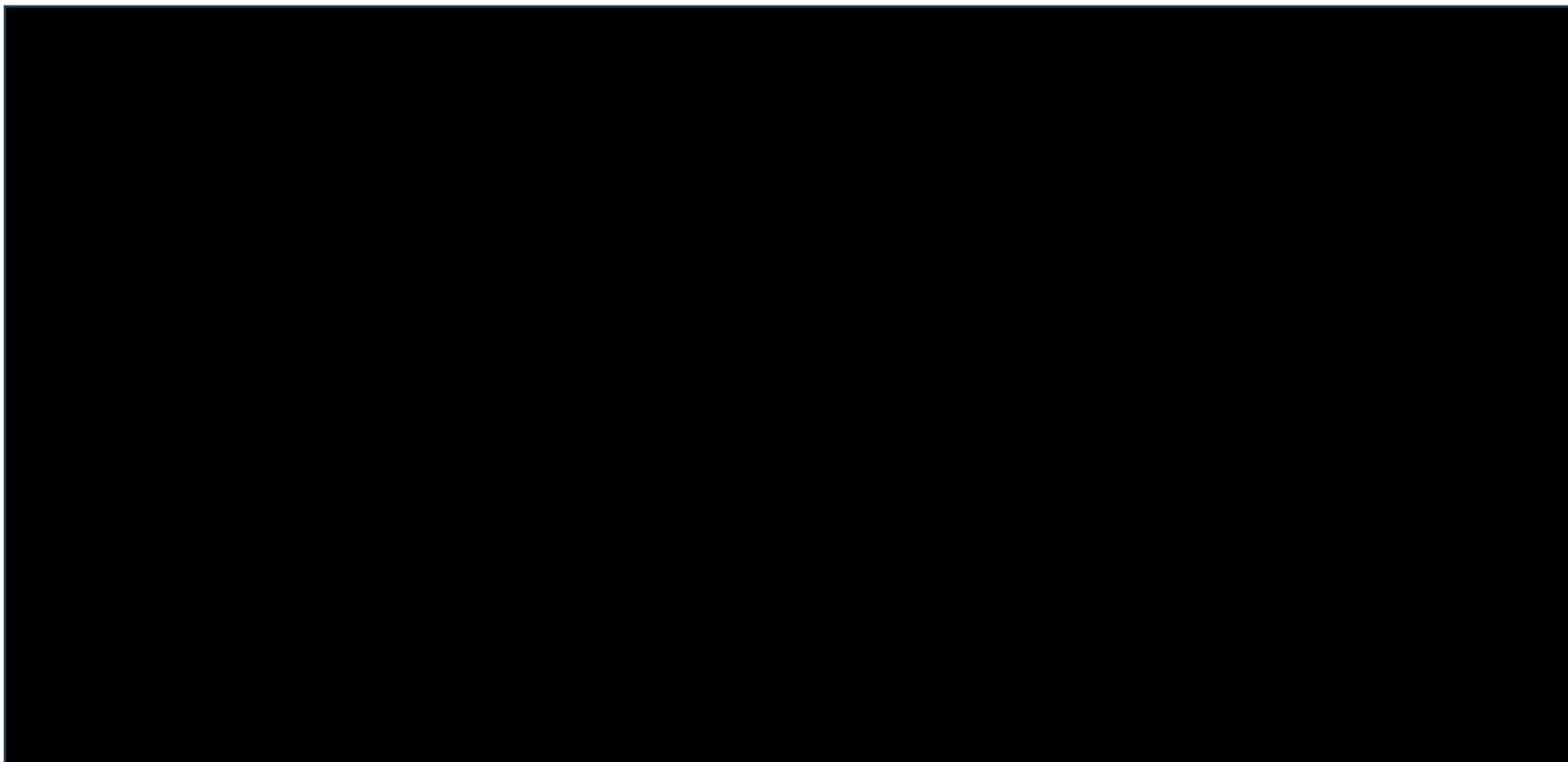


2025年度大学院博士前期課程一般入学試験（第I期）問題

研究科名	科目名
文学研究科 人文学専攻	中国語

次の中文を和訳しなさい。



出典：俞学明『湛然研究』、中国社会科学出版社、2006年、222～224頁。

*問題本文は著作権法上の理由から記載することができません。上記出展箇所をご確認ください。

解答または解答例：

Sample Answer(s) or Outline：

智者（智顗）は、仏陀の説法の過程を「五時」に分けて説明した。

第一は、華嚴時である。釈迦が初めて正覚を得たとき、利根の衆生だけを対象として『華嚴経』を説き、真実義諦を示して、速やかに悟入して正覚を得させた。その説法の方式は頓教であり、たとえば太陽が昇るとき、まず高山を照らして、平地や深い谷にまでは届かないようなものである。味についていえば、牛から乳が出る段階に相当する。

第二は、鹿苑時である。第一時に説かれた『華嚴経』はその義が高速であり、微妙で理解しがたいので、その座にいた小乗の根性をもつ者には合致しなかった。そこで鹿野苑において、小乗の者を対象として四諦を説き、四種の『阿含経』を示した。その説法の方式は漸教であり、たとえば太陽の光が深い谷間にも届くようなものである。味に焦点をあわせれば、乳から酪が生じる段階に相当する。

第三は、方等時である。鹿苑での説法の後、さらに進んで諸種の大乗経典を説いた。小を誡め偏頗な教えを責め、大を讃えて完全な教えを褒め、小乗にとどまらないよう導き、菩薩道へ向かう志を開かせた。すなわち『維摩経』『楞伽経』『金光明経』『思益経』『深密経』などの大乗経を説いたのである。これも漸教である。一日でいえば昼食時に相当し、味に焦点をあわせれば、酪から生酥が生じる段階に当たる。

第四は、般若時である。方等諸経を説いた後、続いて『般若経』を説き、一切の相への執着と大小乗を区別する見解を捨てさせ、諸法が因縁によって生起し、すなわち即ち仮であり即ち空であり、実相に通達することを明らかにした。説法の方式は漸教である。一日でいえば巳の刻の頃であり、味に焦点をあわせれば、生酥から熟酥が生じる段階に当たる。

第五は、法華・涅槃時である。これは仏の説法の最高段階であり、『妙法蓮華経』と『大般涅槃経』を説く時である。それ以前の説法は、実を示して権を開かない場合や、実を隠して権を立てる場合があったが、この時には三乗を統合して円満な一乗へと帰結させるため、究竟円満の教えとされる。教法の観点からいえば、『法華経』は一乗の円教であるため、頓にも漸にも属さない。しかし、権を開いて実を顕す過程からいえば、円実の境地の顕示は漸であるから、「漸円」ともいえる。だが円実がすでに顕れるならば、もはや漸は問題とならず、結局は頓に帰する。すなわち円は頓であり、頓は円であって、円と頓は合一する。円頓に至れば、頓や漸の区別はすべて消え去り、一切の法が実相であり、一色一香として中道実相でないものはないので、頓でも漸でもないといえる。一日でいえば正午に当たり、鐘の影がなく、平地も深い谷間もすべて照らし尽くされる。味にたとえれば、熟酥から醍醐が生ずる段階である。

なお注意すべきことは、智者が南北朝の「五時教」を批判したのは、「五時」という分類そのものを否定したのではなく、諸師が五時を区分した内容の妥当性を批判した点である。したがって、智者がなおも「五時」を用いて自らの教判内容を表現していることには問題がない。

出題意図：

Purpose of Question：

大学院レベルの中国仏教に関する論文を正確に翻訳、理解できるかを判定すること。